



残暑の厳しい毎日が続いていますが、みなさんの「夏休み」はいかがでしたか。9月・10月は、芸術の秋に向けていよいよコンサート・シーズンの幕が開きます。バロックザールでも、続々とおすすめの公演が開催されます！今号は、10月9日(日)にピアノ・リサイタルを開催するアリス=紗良・オットの特別インタビューを

はじめ、9月10日(土)にリサイタルを予定している打楽器奏者の窪田健志さんの独占インタビューを掲載。窪田さんは、2013年度青山音楽賞の受賞者でもあります。連載「わたしはメロマネー」には、京都大学名誉教授の富永茂樹先生をお迎えして、「演奏の前の咳(しわぶき)」から広がる音風景について語って頂きました。

# アリス=紗良・オット リサイタル 特別インタビュー

5月にトーン・キュンストラー管弦楽団との共演で各地を沸かせたアリス=紗良・オット。「報道ステーション」に生出演し演奏を披露するなど話題のアリスに、10月9日(日)のリサイタルに向けてインタビューを行いました。演奏会プログラムのコンセプトから趣味まで、さまざまな質問に答えてくれました。

## Interview

—— 10月のリサイタルでは可愛らしいグリーグの抒情小曲集、日本ではあまり演奏されることのないバラード、そして大曲であるリストの短調ソナタが予定されています。まずこのプログラムの全体のコンセプトを教えてくださいませんか？

アリス=紗良・オット(以下、ASO)：9月にリリースする新譜「Wonderland」にあわせて組んだプログラムです。前半はグリーグの『抒情小曲集』とバラードで構成しました。グリーグがイメージしていた不思議な世界=妖精の世界を楽しんでいただければと思います。最初から休憩までは、皆さまを「夢の旅」「音楽の冒険」にお連れできたら、と思っています。後半は「夢の世界」から一転、リストの『ソナタ短調』です。がらりと雰囲気が変わり、地獄の底のような「死の世界」になります。リストのソナタは15歳の頃から勉強し続けたいたのですが、なかなかコンサートで弾く機会がありませんでした。とても深く、特徴的な曲なので、なかなかプログラミングできなかったのです。今回グリーグのプログラムを考えていた時に、対比にもなるこの作品と組み合わせると、バランス的にも合う！とひらめきました。前半では気持ちよくファンタジーの世界に浸っていただき、その夢から覚めた頃に、ダークな、精神的にも複雑な世界に皆さまをお連れします。私にとっても、もしかしたらお客さまにとっても、チャレンジなプログラムなのだと思いますが、オルフェウスのように地獄に導いていきます！無事、地獄から抜け出せるといのですが…(笑)

人はどんな人でも、いくつかの性格や人格を持っているのではないのでしょうか。今回のプログラムは、2つの対称的なものを描き出すものですから、ご自身の中での旅、心の旅をしていただけるかとも思います。一つのプログラムの中で、このようにギャップのあるものを弾くのは初めてです。私自身楽しみですし、お客さまにも楽しんでいただけたら嬉しいです。

—— その中で、グリーグの抒情小曲集はレコーディング(9月にリリース予定)もされています。何か特別な思い入れはありますか？

ASO：(グリーグの)ピアノ協奏曲はずっと弾いている曲で、たくさんの思い出があります。この曲をレコーディングする時に、あまり演奏される機会がないバラードや、小さい作品が詰まった抒情小曲集がぴったり合うなと思って選びました。グリーグは、協奏曲や『ペール・ギュント組曲』の『朝』などがよく知られていますが、知られていないけれども素敵な作品がたくさんあります。もっと多くの人にグリーグの素敵さを知っていただきたい…。グリーグの曲は、シンプルで同じモチーフの繰り返しが多いです。聴いているうちに引き込まれていく、魅力的な曲です。シンプルだからこそ、聴いているうちに引き込まれていってその世界に入ってしまう…。気がつくとい別の世界にいる感覚になる、不思議の国(CDタイトルの『Wonderland』)を冒険しているような感じになるのです。

—— アリスさんと「リスト」というと、(ラ・カンパネラ)など超絶技巧の小品のイメージがあります。今回、このそれらリストの作品とは一線を画す「短調ソナタ」に挑まれる経緯や、意気込みなどお聞かせいただけますか？

ASO：そうですね。ソナタはとてもチャレンジングな曲です。リストはきらびやかな作品、超絶技巧を駆使するテクニク的に難しい曲などをたくさん作っています。その中でも、ソナタは究極的に難しい作品です。でも私にとって超絶技巧というのは、単に早くパッセージを弾けたり、オクターブを早く弾けたりというようなことではなく、それを使っていかに音楽を表現できるか、ということが大切だと思っています。テクニクは音を表現する道具であって、それをマスターして使いこなせる人こそが本当の超絶技巧の持ち主だと思うのです。リストの『短調ソナタ』は共感する部分がとても多いのに、弾く機会がなかった作品。今回リサイタルで聴いていただけることが、とても嬉しいです。

—— ヨーロッパの日本、アジアだけではなくアメリカでもご活躍で、世界にその活動が広がってきただけ。年間にどのくらいのコンサートをなさっているのでしょうか？

ASO：5年前くらいから少しセーブするようになって、特に今年は2ヶ月のお休みをいただきます。真剣に数えたことはありませんが、年間60～70回くらいでしょうか。

—— レパートリーも多彩ですが、どのようにプランして練習をなさっているのでしょうか？そのための時間を確保するために工夫していることはありますか？

ASO：いろいろな経験をしていく中で、演奏する曲については「No」を言うことも必要だとも思うようになりました。新しい曲を勉強するのはきちんと時間をかけて準備をして臨みたいと思っています。来年はオフを長いタームで決めて集中して取り組むようにしています。私は自分が今いるポジション(場所)に相応しい曲は何か、今取り組むべき作品は何かということも考えるようにしています。好きな曲、弾きたい曲は山のようにあるので、そのなかで今の自分に合う曲を考えるのです。新譜に収録した

## 〈財団ニュース〉公益財団法人 青山財団四條烏丸オフィス開設のお知らせ

2016年6月、公益財団法人 青山財団に新しいオフィスが開設されました。阪急京都線烏丸駅・地下鉄烏丸線四条駅から徒歩2分の場所にあり、遠方よりお越しの方々にもお立ち寄り頂きやすい立地です。この新オフィスでは、主に主催演奏会の企画や広報宣伝を中心とした音楽事業に取り組みしております。今後は上桂の事務所と共にこの新オフィスを財団の情報発信地とし、音楽家の方々のサポートと音楽文化の発展に努めていきたいと考えております。今後とも変わらぬお引き立てのほど、よろしくお願ひ申し上げます。

公益財団法人 青山財団 四條烏丸オフィス  
〒600-8007 京都市下京区立売西町60 日本生命四条ビル8階  
TEL：075-746-6939 Fax：075-746-6938



事務所入り口には、京都芸大准教授の舟越一郎先生がデザインしてくださったプレートが飾られています。



プレートには青山財団のロゴが使用されています。



最大24名収容可能な会議室です。

「拝啓、クラシック・ビギナーのみなさま」

Vol.3

チラシのひみつ

このコラムでは、クラシック音楽や演奏会が大好きな初心者の方々(=クラシック・ビギナー)から寄せられた素朴な疑問に音楽の専門家がお答えします。

**Q：質問というか意見です。コンサートに行くたびに配布されるチラシが重くて邪魔です。何とかありませんか？(50代男性のお客様より)**

**A：**演奏会場の外や会場内で配布される、ホチキスで止められた大量のチラシ…。確かに重い邪魔。じゃ、ゴミ箱に捨てちゃいましょう——と言いたいところですが、それは勿体ない。みなさん、あらためてチラシをじっくり眺めてみませんか。

演奏会のチラシは、日本ならではの文化です(しかもクラシック音楽特有の)。わたしがフランスに住んでいた頃、演奏会は山ほど開催されていたが、日本のようにチラシを配布する習慣はありませんでした。あってもせいぜい手書きのものか、ワープロ打ちのフライヤーくらい。だって、演奏会が終わればチラシが持つ「意味」はなくなり、あとは捨てられるだけです。プログラムが演奏会の記憶を留めておく媒体だとしたら、チラシは演奏会へ誘う役割しか担っていません。

しかし、そのチラシに独特の文化を吹き込んだ国が日本です。紙切れ1枚に、演奏会情報(日時、場所、アーティスト、プログラム、チケット価格など)を詰め込むだけではなく、使用される写真やデザインで「どんな公演(になる)か」、「どんなアーティストか」伝えようとする。その一枚を見て「よし、この公演に行ってみよう」と聴衆に思わせるような、そんなチラシにしなければいけません。そこで、チラシを作る際に「ウリ」を見つめるわけです。例えば、凝ったプログラムの場合はそれを強調するような作りにしたり、あるいは自身の「美」を武器にしたり(チラシ全面に置きプロファイル写真を掲載する例も。たまにサギ写真があるとかないとか?いえ、冗談です)。今やチラシは、様々な趣向を凝らして聴衆を演奏会へと誘う、なくてはならないメディアにまで発展しました。

バロックザールの主催公演チラシを作る際も、チラシ一枚で端的にアーティストや演奏会内容を表現できるように、デザイナーさんと相談しながら作成します。特に、キャッチコピーを考えるときは、事前のリサーチを徹底的に行います。このキャッチコピーが意外と大事。チラシの主役となるアーティストの演奏や経歴はもちろん、彼らのオフショットやインタビューに至るまで細かく調べ上げます。そして、そのアーティストを端的に表す「絶妙な一言」を導き出すのです。それは長すぎてダメ、短すぎても伝わらない、多すぎる漢字は固すぎるし、かといって平仮名やカタカナばかりでは読みにくい。

そのチラシを手にとった人がキャッチコピーを見て、即座に演奏会をイメージ出来るような一文にしないではいけません。最近で言えば、7月3日に開催されたミハイル・プレトニョフの公演チラシ。そこに掲載したキャッチコピーは「復活から3年——巨匠プレトニョフ、ピアノを超える」でした。休止期間を経て復活したピアニスト・プレトニョフ、久しぶりに聴いた彼の演奏はまさにピアノを「超えて」いました。

さて、公演後のチラシについて。演奏会へと誘う役割を終え、ただの紙切れとなってしまったチラシですが、見方次第ではとても面白いものに。例えば、皆さんもよくご存じのピアニスト、マルタ・アルゲリッチとマウリツィオ・ポリーニ。2人の過去のチラシをたどっていくと、面白いことに気付きます。どちらのチラシにも、時折現れる「曲目未定」という表現。チラシには同じ言葉が掲載されているにもかかわらず、全体から漂う雰囲気は驚くほど異なります。ポリーニの「曲目未定」は「ああ、あの思慮深いポリーニは、プログラムを未定にするほど悩んでいるのか…」と思わせるのに対して、アルゲリッチは「…彼女はいったい何をするのか…」と何と危険な香りがしませんか(しかも彼女の場合は、その公演が開催されるのか否かという意味でも、最後までスリリング)。このように演奏会後、好きなアーティストのチラシを年代別に並べて見比べても楽しいし、奇抜なデザインやキャッチコピーのチラシを集めて笑える部分を探しても面白そう。実際に、評論家の鈴木淳史さんは大量のチラシを集めて一枚ずつ批評するという「チラシで楽しむクラシック」(2007年双葉社)という本を出しています。鋭い視点からクラシック音楽のチラシ文化に切り込んだこの本、クラシック音楽ファンなら垂涎ものの黄金エピソードがあちこちにちりばめられています。たかが一枚のチラシ、でもそこには無限のドラマが広がっているのです。(高野裕子、音楽学・音楽評論)

「メロマネーmelomane」とは、フランス語で「熱狂的な音楽愛好家」。連載「わたしはメロマネー」は、第一線で活躍するあらゆる分野のエキスパートたちに、自身の「クラシック音楽体験」を自由に語っていただき、多彩で豊かな音楽風景を皆さまにお届けするシリーズです。第8回目は、京都大学名誉教授の富永茂樹(とみながしげき)先生をお迎えします。京都が誇る芸術の創造・発信拠点である「京都芸術センター」館長や、京都文化芸術都市創生審議会委員を務めるなど、長年、京都の文化芸術の振興にご尽力なさってきた富永先生。そんな先生の目にはどのような「音楽風景」が映るのでしょうか。

**演奏の前の咳(しわぶき)**

一つの楽章が終わるなど、ある曲の演奏区に切りが付き、ごく短い休止のときになると、会場からは休止を待ちかねていたかのように、一斉に咳の合奏がきこえてくる。いつまでも続くわけではなく、指揮者あるいは演奏者が次の演奏をはじめると息がとんとんで、ごく短いあいだのことである。短いあいだではあるが。しかしたいへん不自然で不愉快な咳ではある。

どうして不自然か。それはまず、今の会場にそんなにたくさん風邪をひいている客、喘息に苦しんでいる人のいるはずがないからである。身体的な条件によるのではない、そして出そうになるのをこれまでこらえていたようではない咳がほとんどである。咳をしても替められないときがきたので大っぴらに、いや無理やりにでもしているといったふうの咳。そんな咳をかなり多数の人がいっせいにしている。

演奏の途中で咳やその他の雑音は、演奏する側にとっても聴く側にとっても邪魔なものであることはあらためていうまでもない。それでも雑音の生じるのを防ぐために演奏と演奏のあいだになされる咳が、大袈裟とわざとらしさ、さらには不快をとまなうのはどういわけなのか。

音楽の演奏会だけではなく、演劇もまた、とりわけ近・現代の劇場では客席の沈黙を前提に上演されることがおおい。だがシヤイクシアのころには、舞台も客席もともにもつとにぎやかであったと想像される。あるときグループ座の調査で地面を掘り返したら、大量の牡蠣の殻が出土したという。「ロメオとジュリエット」の観客も牡蠣を食べていたのか。また18世紀のヨーロッパの劇場の多くには「平土間」という一階

**富永茂樹(とみながしげき)** / 1950年生まれ、京都大学名誉教授。専門は知識社会学。著書に『理性の使用一ひとはいかにして市民となるのか』(みすず書房、2005年)、『トクヴィル 現代へのまなざし』(岩波新書、2010年)など。2009年から2015年まで京都芸術センター館長を務めた。